

米芾の学書歴 (どのように書を学んだか)

古典の字をただ集めて書いただけ、と貶され「集古字」と呼ばれた米芾は、自らの学書歴について述べている。

（自叙書学）「学書帖（行書帖）」などと呼ばれて、『群玉堂米帖』に収められている）

「七、八歳の頃に顔真卿を学び、つづいて柳公權の金剛經を学んだ。柳公權の書風が欧陽詢より出ていることがわかつたのでつぎに欧陽詢を学んだ。つづいて褚遂良を学んだ。これを最も長く学んだ。そして段季展を慕い学んだが、段が蘭亭序から出ているのが分かったので法帖（淳化閣帖）を看ることにして、晋魏の平淡の趣をとり入れ、鍾繇の四角な字を捨てて、師宜官を師とした。さらにさかのぼつて篆書は咀楚文、石鼓文を好んだ。また竹簡は竹を筆とし、漆で書いたものであり、しかも鐘鼎の銘は古老の美に妙なることを悟つた。壁に書く字は、沈伝師をもつて主とした。しかし、小字は大いにとらない、大いにとらない。」と述べている。※宋代に漢簡の発掘があった。

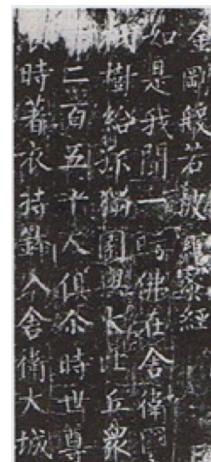
米芾の書の遍歴は中唐から初唐、晋、魏、秦漢とどこまでも溯つている。

米芾はいろいろな古人の長所をとり、それらを総合し、自分の書をつくりあげたと言つている。（既に老いて始めて、自ら家を成すなり）

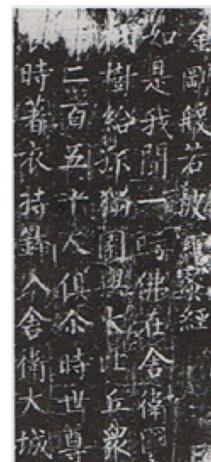
顔真卿 「顔氏家廟碑」部分 780



歐陽詢 「九成宮醴泉銘」部分 632年



褚遂良 「金剛般若經」部分 824年



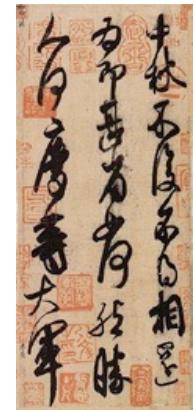
唐故通議大夫行薛王友柱國贈祕書
微風徐動有淒清之涼信安體之佳所誠養神

王羲之 「蘭亭序」部分 353年



王獻之 「中秋帖」

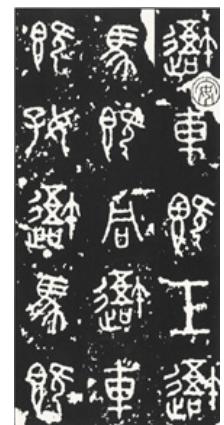
大唐三藏聖教序
太宗文皇帝製
蓋聞二儀有象顯



「石鼓文」部分 紀元前374年頃？



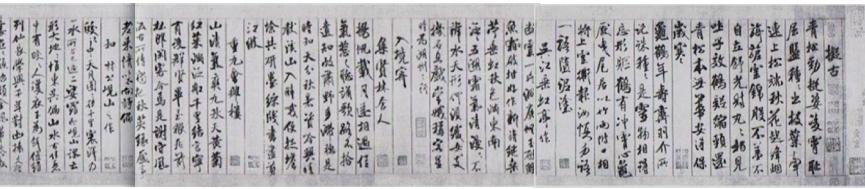
「詛楚文」部分



沈伝師 「柳州羅池廟碑」 823年？



94



(冒頭部分)

藏品
擬古
青松勁挺姿凌霄耻
屈盤種出枝葉旁
連上松端秋花碧烽烟
倚旛空錦殷不垂不

卷古

織り目 (冒頭部分)

縦画が行の流れを作っている

同じ幅の字が等間隔に連なるピッチカートのような行構成

龜鶴年壽齊羽介所

吐子效鶴絆縮頬還

結構法の特徴

右上がりが強い

青

今

秋

古

左上部を強くする

害

偏

若

娑羅

左に傾いている

葉 南

望

宵心龜

縦画が背勢

射

沖

斷

林 中

縦画の画を伸ばす。横画の左が長い。

青

姿

畢

首

縦長の字形が多い

霜 氣 清

偏と旁がくつついている

移 隘 經

シンニョウは前屈し、三画目の起筆は露鋒

速 還

サンズイやニスイは余白を作らないようにしている

清 淳 婆

並んだ画は筆づかい（起筆、筆圧、そりかた、方向など）を変えている

青 青

目などは上部の余白を広くとっている

自 相 見

包みこむような冠。二画目が大きめ、三画目の横画が細い。

寒 霽 寄

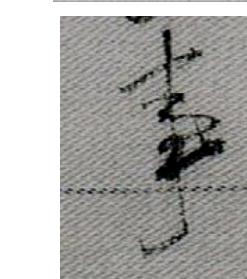
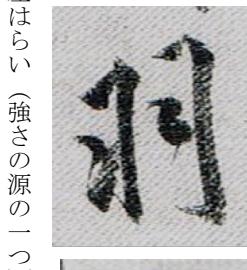
基本点画

横画（露鋒、藏鋒、逆筆、側筆、中鋒さまざまである）



縦画5種（背勢、直勢、左右にうねるものなど）

転折は円味があるものが多い（打ち返しのあるものなど6種ほどある）



左はらい（強さの源の一つ）

はね（代表的なもの4種）





点法

「書を学ぶにはまず執筆を一番に考えるべきで、自然に筆が持てた次は、筆を使いこなすことが大事である」（米芾）

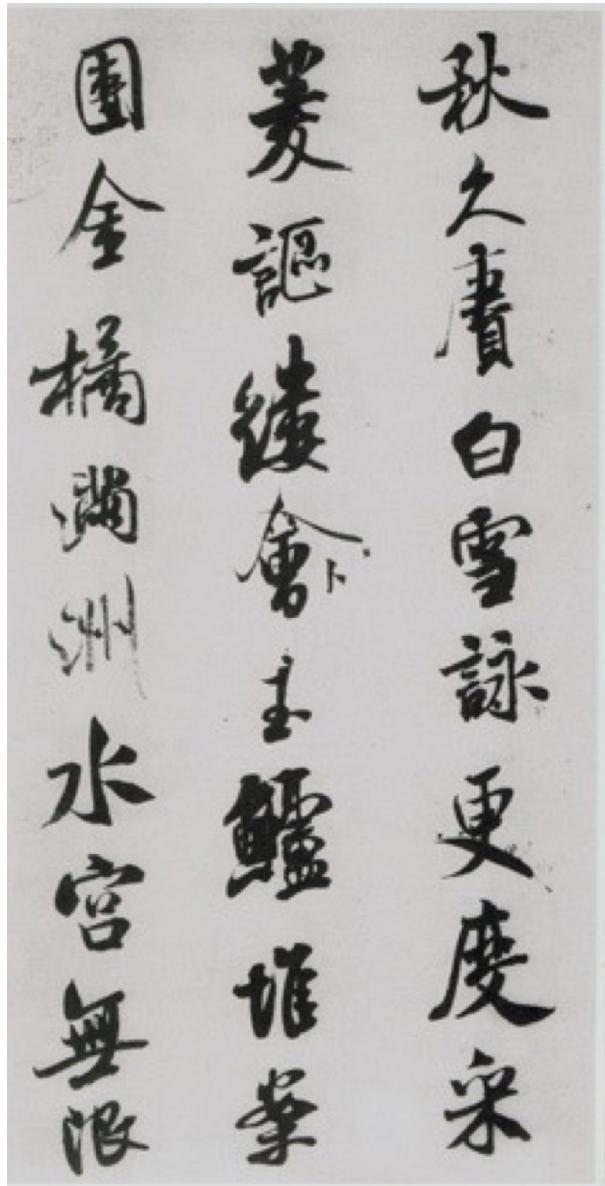
ちようけいしかん
苕溪詩卷 1088年（元祐3年）真蹟 米芾 37歳の行楷書 卷子 紙本

「蜀素帖」の一ヶ月ほど前に書かれたものである。

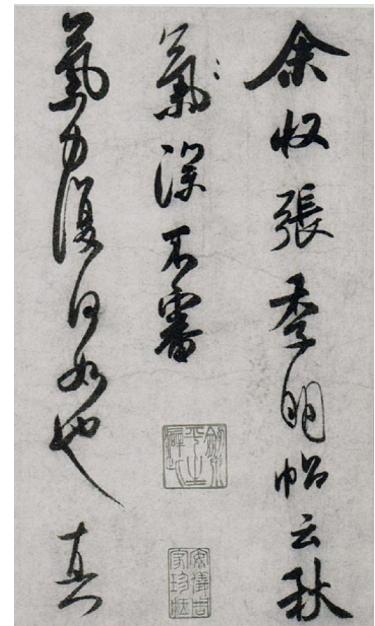
林希に招かれて苕溪に遊びに行くときに友人たちに贈った自作詩が書いてある。
五言律詩六首を澄心堂紙に35行で書いてある。

「蜀素帖」とともに米芾独自の書風がつくりあげられている。

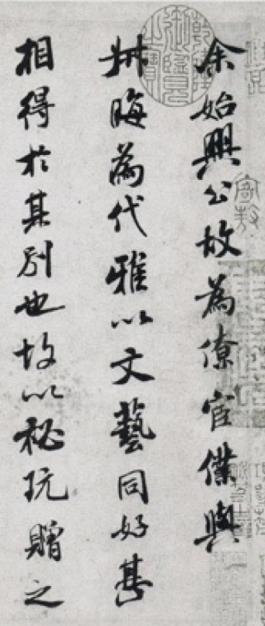
部分



「**張季明帖**」ちようきめいじょう 「**叔晦帖**」しゆくわいじょう 「**李太師帖**」りたいしじょう を合装したものです。



余叔張季明船云秋



林晦為代雅以文藝同好

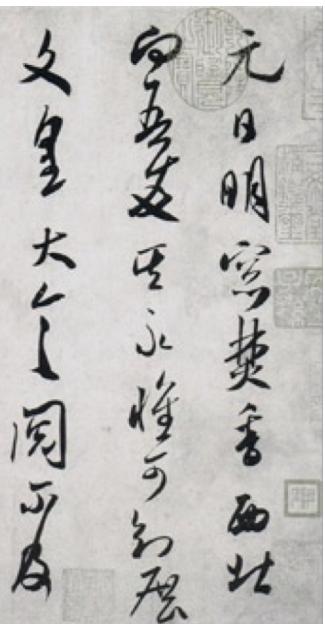
相得於其別也故以秘玩贈之

李太師收一秀質十四
怡武帝玉成書室

李太師收一秀賢十四

怡武帝玉函書之右

草書四帖 大阪市立美術館蔵



元日明寫樊香西坡

向西望雲水惟有萬想

文皇大令同所用

他書法家書亦不外此

讀書者立焉無能，慎

人也多陋作浮友一

されたため四帖と呼ぶ。「元日帖」「吾友帖」「海岱帖」は尺牘せきとく（手紙）である。「中秋詩帖」「目窮帖」は詩である。

著 はるか賀鑄経道
行 来慰人意玉筆換
十 繫以社何如雨立
其 好人生幾何吾聞
甚 欲品有意一介的り
矣 者同主人付子敏
ニ 怡未授玉教却付
一 軸 未正示倍目賀
見此中子乃云公所取
絶黒頭僕者此理如何
一 丈 多密著 はるか

虹縣詩卷 最晩年の行書 紙本 約縦31×490 東京国立博物館蔵

柔らかい白紙（白綿紙）に大字で書かれている。十紙をつないでいる。つなぎ目（紙縫）には米芾の印が押してある。

巻末に元好問らの跋文がある。

米芾が虹縣に遊んだときの旧作の詩一首と再遊した時の詩二首を書いたもの。

第一首目

「虹縣旧題に云う。快霽一天、淑氣清し、健帆千里、碧榆の風。
満虹の書画、明月と同にす、十日隋花、窈窕の中。」



虹縣 舊題

云快



淑 天清

雲霽



淑 天清

雲霽

用筆は多彩で自由自在である。

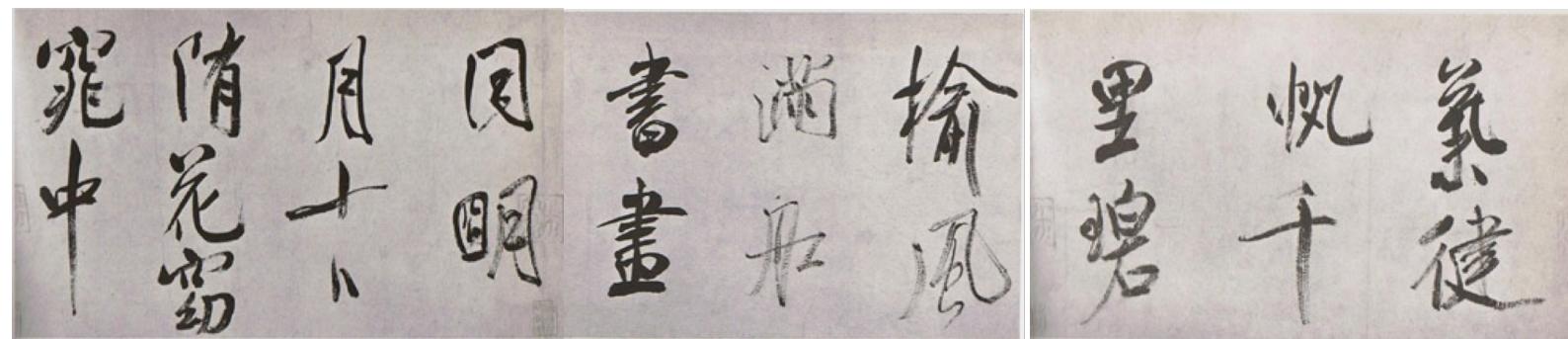
多彩ではあるが基本的には中鋒であり線質は強い。
露鋒に比べて逆筆藏鋒の用筆が多くなっている。

宋代の美意識

調和や秩序や均整の美から変化や動きや力強さへ、
しかし米芾は晩年にゆくほど力強さと変化の中に均衡と調和

の美を実現していく。

米芾は年齢を重ねるとともに衰えることなく逆筆、藏鋒、側筆、
露鋒など自由自在に筆を使いこなしている。



(宿題) 唐の四大家の名前を挙げ、各大家の代表的な楷書作品を比較して、それぞれの書風の違いと

各大家に共通した原理を説明せよ。

解答の長短は問わないが説得力あるレポートを提出すること。締め切りは次回もろもろ塾。